



## 新型コロナウイルス感染拡大の中でもICTを駆使した遠隔授業で学びを継続。

金城学院大学では、新型コロナウイルス感染拡大に伴う影響への対応策を検討するため、2020年2月20日(木)、「新型コロナウイルス対応チーム」を立ち上げました。当初の課題は、感染予防策、各省庁からの通知に対する本学の対応策、諸行事等の開催・中止の判断の検討・決定・周知で、大きなところでは、学位授与式と入学式の中止を決定しました。その後も感染拡大は止まず、新年度の各種オリエンテーションや前期授業の実施、スクールカレンダーにまで検討の範囲が及んだことから、3月12日(木)、新型コロナウイルス対応チームを「新型コロナウイルス緊急対策本部」へと組織変更。本来なら学内の諸手続きを経ることが必要な事項についても、緊急を

要する場合は関係各位・役職者と協議したのちに、学長が決定する措置を取れるようにしました。

対策本部は新旧教務部長、学生部長、マルチメディアセンター長などを中心に、遠隔授業(オンライン授業)の実施、スクールカレンダーの変更、教員と学生に必要な施設・設備・ツール、遠隔授業運営上のルールについて、国や県の緊急事態宣言を含む様々な状況を踏まえながら検討しました。

現在は大学の持てる資源(施設・設備・ツール)を最大限活用しながら、遠隔授業を実施しています。遠隔授業による学習成果が、対面授業のそれに引けを取らないものとなるよう、これからも全力で取り組んでまいります。

今回の遠隔授業実施に際して用いた設備・ツールをご紹介します。

### ① ネットワーク回線

6月1日(月)から対面授業が一部で開始され、来学した学生たちのアクセス回線も必要となったことから、従来の回線を一部増強しました。さらに7月中旬には10GBの回線へと容量を増強。もし夏以降にコロナが再流行しても、リアルタイム双方向授業が円滑に行えるよう対策を講じました。



### ② manaba (マナバ) 2013年度より導入

manabaはクラウド型教育支援サービスで、従来より全授業科目のコースを開設して教育に活用していました。今回の遠隔授業では、すべてこのmanabaを介して実施しています。「ニュース」機能で学生に様々な通知をし、「コンテンツ」機能で学習活動とそれに必要な教材を提供。「レポート」機能で課題提出をさせ、「スレッド」機能で質問を受け付けたり、学生間の意見交換を促したりしています。



### ③ Kシリーズ 2008年7月より導入

本学では、Googleのアカウントを全学生、全教職員に配布しています。このアカウントで利用できるGoogleのサービスであるG Suiteは多種多様で、遠隔授業などで活用し、教材や提出課題の保存や共有にも用いています。



**Kmail:** メールを送受信するGmailの金城版で、いわゆるWebメールです。



**Kドライブ:** Googleドライブの金城版で、いわゆるオンラインストレージ(容量無制限)です。



**meet:** ビデオ会議用アプリで、学内会議やリアルタイム双方向授業に活用。

### ④ Office 365 ProPlus 2017年度より導入

本学の全学生、全教職員はOffice 365 ProPlusを個人のパソコンなどにインストールして利用することができます。ワープロソフトWord、表計算ソフトExcel、プレゼンテーションソフトPowerPointは、どの授業においても用いる欠かせないツールです。



#### 遠隔授業環境整備支援金

遠隔授業を実施する上での施設・設備・ツールがどれだけ整っていても、授業を受ける学生の皆さんのネット環境が整ってなければ意味がありません。本学では、ネット環境の調査をして対応を検討するとともに、必要な通信環境の整備等に利用していただけるよう、支援金を支給させていただくこととしました。



## ソニー幼児教育支援プログラム 「優秀園実践提案研究会」を開催しました。

2020年2月1日(土)、金城学院幼稚園主催の研究会を開催しました。これは2018年度「ソニー幼児教育支援プログラム」優秀園受賞をきっかけに企画したもので、講師に若月芳浩氏(玉川大学教授)をお招きしての記念講演や園庭ワーク、実践発表などを行いました。当日は教育関係者に加え、保護者や建築関係者を含めた約100名の方が参加。愛知はもとより、東京や神奈川、奈良、大阪、山口など遠方からも多くの方が来てくださり、子どもたちを取り巻く環境への様々な思いを共有することができ、充実した研究会となりました。



### 「園庭ワーク」を通して本園の魅力を発信

幼稚園では、子どもたちの遊びによって変化していく園庭をより遊びの深まる園庭になるよう、保護者の方々と整備していく「園庭ワーク」を年4回行っています。本園の特徴でもある園庭の魅力を伝えたいという思いから、研究会ではその園庭ワークを「公開園庭ワーク」として実施。作業に夢中になるなかで、参加者が保護者と話し込む姿があちこちで見られました。また、アンケートには「保護者の方々が、園庭整備のやり方や子どもがどんなふうにいるのかということ伝えてくださり、楽しく作業できました」、「子どもが育つ環境の意味を知っているから語れると感じました」など、保護者の皆さんを称賛する内容のものがいくつもあり、嬉しい限りです。



### 園庭の成り立ちを知り、理解を深めた実践発表

午後から行われた実践発表では3人の方に園庭にまつわる話をいただきました。金城学院大学准教授であり、元教諭でもある日比野直子先生は、現在の園庭ワークに繋がる話のなかで、常に使い手により手を加えていける可変性のある『未完成の完成』を目指していた当時を振り返っていただきました。また、当時から現在に至るまで建築家として携わってくださっている大井幸次氏には、作り手側の話に加え、素材の特徴やそれを活かす方法・工夫までを細かく教えていただきました。現教諭である白井安希先生は、四季折々の遊びの様子から子どもたちがどのように遊んでいるかを伝えると共に、保護者が本園の保育にどう関わっているのかを報告しました。



### 子どもも大人も“やりたい”が 実現できる保育を目指そう

続いて行われた若月芳浩氏による記念公演では、遊びを中心に据えた保育の大切さ、子どもたちの姿に寄り添うことで一人ひとりの主体性を引き出すこと、そのために環境が重要なことを話してくださいました。また無限の可能性を持った園庭作りを目指し、問い続けてきた当園の取り組みの大切さを再確認したうえで、子どもの視点に立った保育の方向性を一般論ではなく園独自のすることとして、子どもも大人も“やりたい”が実現できる保育を目指して、園として可能なことを探ってくださいと力強いエールをいただきました。



園庭ワークの様子



## ひとり1台のiPadが切り拓く 新たな学びのカタチ。

社会の情報化が進む中、学校教育の現場においても「ICT教育」の導入が急速に進められています。本校でも、2020年度より中学1年生から高校1年生まで、iPadひとり1台の体制が整い、ICT教育が本格始動。さまざまな教育活動に活かしています。

ちなみにICT教育とは、パソコンやタブレット端末を介してコミュニケーションをとっていく教育方針や取り組みのこと。今後、高等学校では2021年度に1、2年生が、2022年度には全生徒がひとり1台のiPadを所持することになり、ICTを活用した取り組みをさらに広げていく考えです。そこで今回は、本校のICT教育の現状と今後の目標をご紹介します。



▲ デジタル教科書を使った英語の授業

### ICT教育の本格始動に向け 教員のスキル向上とサポート体制を整備

本校のICT環境については、中学校、高等学校ともに新校舎を建てた時点で高等学校には各クラスにプロジェクターとwi-fi設備を導入。中学校はそこに加えて電子黒板を整備し、あとは生徒たちの端末(iPad)が揃えば、すぐにもICTを活用した授業展開ができるような体制を整えていました。

一方、ICTをより効果的に活用していくためには、教員一人ひとりのICTスキルを高めていくことが不可欠です。そのため、2019年の夏から教員対象の研修を重ねてきた他、iPadを利用した授業研究や模擬授業の企画など、実践的な取り組みも行ってきました。また同時並行で、中高ネットワーク委員会の教員が一体となって情報セキュリティの仕組みを構築し、実際に活用していく中でのサポート体制の整備も進めてきました。

現在、教職員間の連絡配信、職員会議資料の共有、教員から生徒・保護者への連絡などはすべてiPadを含めた情報機器を活用し、ペーパーレス化を実現しています。

### 学習クラウドサービス「Classi」を導入

本校では、学校教育のICT化を支援するツールとしてClassiを活用しています。たとえば授業の中では、教員が作成した課題プリントを生徒たち



のiPadに配信し、生徒は自分のiPadに答えを入力します。生徒たちの答えは教員用のiPadに集約されるので、教員は何人かの解答を選んでプロジェクターに投影。それを見ながら生徒同士で意見を交わしたり、評価をする中で最適な解答に導いていきます。また、Classiは進研模試の結果と連動できるので、生徒の学力データの管理・分析がしやすくなります。さらに、日々の学習成果や活動記録を常にiPad上にデータ化し、積み上げていくポートフォリオは、大学入試対策にも欠かせない機能です。

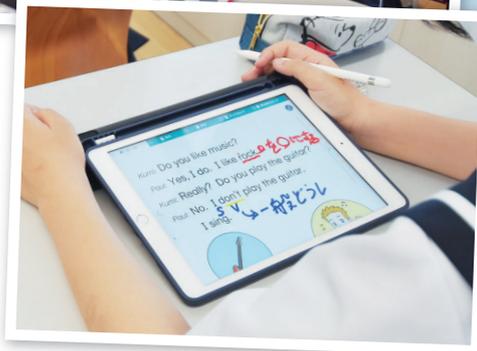
また近年はICTを活用したデジタル教材が充実しています。本校でも、国語と英語の教科書、化学と生物の資料集、数学の

## 2019年度卒業生進路状況

今年度の金城学院大学への進学者数は、内部推薦者166名に一般推薦・受験での進学者13名を加えて計179名(卒業生全体の59%)でした。内部推薦では多くの生徒が第一希望の学科に進学することができました。また、「協定校推薦制度」を利用し、関西学院大学へ

11名、同志社女子大学へ4名の生徒が進学をしていきました。

外部受験では国公立大学合格者が名古屋大学2名、岐阜大学4名、岐阜薬科大学1名など合計9名となりました。私立大学へも、慶応義塾大学2名をはじめ、国際基督教大学1名、津田塾大学5名、東京理科大学2名、青山学院大学5名、明治大学4名、立教大学2名、中央



問題集などのデジタル教材を導入し、授業で活用しています。デジタル教材は持ち運びの負担が軽減されるだけでなく、文章や図表を拡大したり、動画や立体図を見たり動かしたりすることができ、授業内容のより深い理解を促すことができます。

を使い動画を見ながらスピーキングの練習に取り組んだりします。また、コロナ禍による休校中には礼拝の様子を動画に撮って配信するなど、ICTは教室

以外のさまざまな場面でも活用されています。

これは後日談ですが、本校では生徒へのiPadの受け渡しを4月に学校で行う予定にしていました。それが今回の新型コロナウイルス感染症の影響で学校が休校となったため、急遽生徒の自宅にiPadを郵送。予定外にも生徒の自宅とのオンラインでClassiを用いた教科ごとの課題の連絡と配信、学習・生活面の相談など双方向の生徒サポートを行うことになりました。さらに教員自ら授業動画を作って配信するなど、休校により教員のICT技術のスキルアップがなされることとなりました。コロナ禍の中で本校の教育のICT利用は一気に進みましたが、まだまだ解決すべき課題もあり、さらに発展的な学習法に取り組んでいかなければなりません。そもそも本校がiPadを導入した一番の目的は、生徒たちがICTを活用して情報の収集・整理・分析をし、プレゼンテーションするという「探求型学習」を推し進めることにあります。そのためにも、教材づくりも含めた魅力ある授業づくり、環境の整備に努めていきたいと考えています。

## iPadを活用して、自ら調べ、判断し、表現するチカラを育てたい

本校のICT教育はまだスタートしたばかりですが、iPadやClassiの導入は、教育にさまざまな効果をもたらしています。ひとつは、教員が一方的に喋るという従来の一斉型授業から、生徒同士の「学びあい」「教えあい」の授業が生まれてきたこと。教員にとっても、今までは授業の軸になるのは積極的に発言する生徒になってしまいがちでしたが、iPad上であれば大人しい生徒も自分の考えや思いを書いてくれるので、その頑張りを評価してあげられます。また、生徒の学習の進み具合や理解度が把握できるので、授業の見直しや改善につなげていくことができます。体育の授業や部活動では、写真や動画を使って運動のフォームをチェックしたり、英語では学習アプリ

大学7名、南山大学24名、同志社大学4名などの合格者をだすことができました。また、医学部医学科の合格者は現役・浪人あわせてのべ11名でした。

卒業生の今後のご活躍をお祈りしています。

(進学者実数)

国公立大	私立大	金城学院大学	国公立短期大学	私立短期大学	専修・各種学校	就職	進学準備	その他 (海外留学など)	卒業生総数
8	104	179	0	2	2	0	11	0	306